



## “死”に戸惑う医学生（1）

### 医療法人パリアン理事長 川越 厚

最近、大学病院でお亡くなりになる患者さんが大変少なくなり、研修医や医学生が死に立ち会う機会がほとんどなくなった。こんな話のある大学病院の医師から聞いたことがある。

大学病院で剖検（病死した患者さんの解剖、いわゆる病理解剖のこと）の数と頻度が減ったという話を以前聞いたことはあったが、死そのものが少なくなっているという話には大変驚いた。鉄を叩きあげる大切な時に、死と向き合うことなく、死を知らない医師が増えるとするれば、これからの医療はどうなるのか。大学病院の医師の話聞きながら、医学教育の在り方について深く考えざるをえなかった。

パリアンは、ひと月に約15名のがん患者さんの在宅死に関わっている。1カ月研修に来る研修医は言うまでもなく、1週間の実習を受ける医学生も「ひとは、例外なく死を迎える」という厳然たる事実をしっかりと学んでほしいと考え、可能な限り死亡診断には研修医や学生を同行するようにしている。今年からパリアンで在宅医療の実地研修を引き受けることになった東京大学医学部の学生（5年生4名）も、例外ではない。実習の初日の月曜日の朝、早速その機会がやってきた。

亡くなった患者さんは乳がんの40歳代前半の女性。教員のご主人との間に4歳になるかわいい娘さんがいた。その日の朝ご主人が仕事に出かけてほどなく、手伝いに来ていた実家の母親の介助で彼女はトイレへ立った。それはそれでよかったのだが、そこで彼女の状態は急変して全く動けなくなってしまった。母親の力ではどうしようもなかったため、パリアンに支援の要請の緊急電話が入ったのである。

連絡を受けた担当の看護師がすぐ現場に向かったのであるが、母親がひどくあわてているとの事だったので、僕は急いで患者宅に電話した。案じたとおり、娘さんの急変に母親はすっかり動転していた。「ママ、ママ。死なないで！」泣き叫ぶ女の子（孫娘）の声が、母親の声をかき消していた。

「娘さん、トイレで立てなくなったのですね。大変でしたね、心配でしょう。いま担当の本田看護師がそちらに向かっています。しばらくお待ちください。」

「先生、ちょっと待ってください。」

彼女はこう言って僕との話を中断し、娘さんの所に戻っていったようである。「しっかりして」と娘さんが孫娘の泣き叫ぶ声とともに、僕の耳に入ってきた。

「目が上にひっくり返り、呼んでも応えません。呼吸もしているのかしていないのかわかりません。」

「トイレで用を足しているときにお亡くなりになることは、病院でもよくあるのですよ。迷走神経反射と言って、血圧が下がるのです。」

「ああ、そういうことだったのですか。」

「で、苦しそうな様子ですか？」（2ページへ）



(1ページから)

「いえ、それは全くありません。」

「本当によくがんばられましたからね。ひと月近くご自宅でいい時間を持たれた、と看護師から聞いています。」

「病院での状態を見ていましたので、このように充実した時間が持てるとは夢にも思ってもいませんでした。覚悟はできています。」

僕と会話することで、彼女は少し落ち着いたようだった。ちょうどそこへ本田さんが到着し、電話を替わった。

「先生、ほとんど呼吸していません。」

「わかった。ミーティングが終わったらすぐ行くから、とりあえずご主人に連絡を取ってください。」

本田さんの涙声から、彼女も大変辛い思いをしていることがよくわかった。患者さんよりも少し年若い、同い年の一人娘が彼女にもいるのである。

二人の医学生とともに、僕は患者さん宅へ急いだ。(次号に続く)

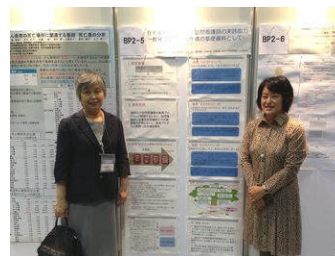


## パリアン関係ポスター発表4件のうち「優秀ポスター賞」2件受賞

### 川越厚先生基調講演、6月21・22日の日本緩和医療学会学術大会で

平成25年6月21・22日にパシフィコ横浜で開催された日本緩和医療学会学術大会で、川越厚先生がシンポジウム「いきいきと生き、幸せに逝くために」で基調講演をした他、パリアンに関係するポスター発表が4件あり、うち2件が「優秀ポスター賞」を受賞した。人が生きて最期を迎えることに関する自身の経験と医療従事者がどう向き合うべきかというテーマで、映像も入れた川越先生の基調講演(シンポジウム1)では、参加した医師や看護師は涙ながらに熱心に聞き入っていた。

優秀ポスター賞を受賞したうちのひとつは、訪問看護パリアン所長・渡邊美也子看護師(演者)、川越博美看護部長ら緩和ケア訪問看護ステーション連絡会のメンバーによる研究「在宅緩和ケアを担う訪問看護師の実践能力～教育プログラム作成の基礎資料として～」。在宅緩和ケアに関わる医師・看護師11名にインタビューをした。



発表したポスターの前で記念撮影

・価値観」などを含めた看護師としての資質の向上が必要であるとした。

もう一つの受賞は、パリアンが連携しているフロンティア薬局の前田圭吾薬剤師(共同研究者:川越先生、パリアンの賢見卓也看護師ら)による「在宅緩和ケア対応薬局のネットワークと情報提供」。医療用麻薬が用意できないことが理由で自宅に帰れないことがないようにするため、医療用麻薬が調剤できる薬局のデータベースを作り上げたという。

また、ほか2件のポスター発表は、聖路加看護大学・池口佳子先生(共同研究者:パリアンの川越看護部長、本田晶子看護師、内田千佳子看護師ら)の「緩和ケア訪問看護師教育プログラム開発に向けた文献検討」と、賢見卓也看護師の「若い乳がん患者の経済的苦痛(社会的苦痛)の緩和に取り組んだ症例」。賢見看護師らはがん患者の経済的苦痛を緩和するためのツールとして「がん制度ドック※」を開発・一般公開し、2年前から取り組んできた患者の経済問題の解決を期待している。

<※:「がん制度ドック(<http://www.ganseido.com>)>とは、がんと診断された方が利用できる公的・民間医療保険制度(お金)に関連した制度をまとめて検索できるウェブサービスで、現在の病状・体調・ご希望に合わせた制度を検索できる。読売新聞や保険毎日新聞に取り上げられた。>



## 第2回医療法人社団パリアン公開講演会、開催される

第2回医療法人パリアン公開講演会が第一ホテル両国に隣接したKFCホールで平成25年8月31日、330人のご来場者が参集して、大盛況のうちに開催された。

今回の講演会は、医療法人社団パリアン理事長・川越厚先生が平成25年7月に上梓した「がん患者の在宅ホスピスケア」出版記念として企画されたもので、講演テーマは「チームによる在宅ホスピスケアの実践～心に残る出会いと別れ～」。



在宅ホスピスケアの教科書としては、1991年出版の「家庭で看取る癌患者」、1996年出版の「在宅ホスピスケアを始める人のために」。そして今回の3冊目が「がん患者の在宅ホスピスケア」であり、実際経験して感じたこと、考えたこと、やったことを詳細に紹介し、川越先生は特に数多くのコラム「心に残る患者さん」では、在宅ホスピスケアの実際がよくわかるよう多くの患者さんを紹介したという。

20数年にわたって末期がん患者の在宅医療に携わってきた川越先生は、2千人以上の患者さんとの出会いと別れを経験し、そのうち特に心に残る出会いを、今回の講演の中で数多く報告された。川越先生ご本人による朗読やスライド、各テレビ局で放映された取材ビデオ、パリアンで実習を受けた医学生が作成した動画を織り交ぜて、その当時のことを思いおこしながらの講演に、目頭を押さえる参加者もいた。

賛育会病院長時代に重症の赤ちゃん（の気持ちになって2人の助産師がメッセージを書いている）とそのお母さんを繋ぐ交換日誌、死を伝える育児ノートを見て、ホスピスケアの原点ともいべき事を彼女たちから教わり、まもなくお迎えが来るからこそ、残された時をどうやって有意義に過ごしていくか、意味のある生活を実現するかを考えなければいけないことを改めて教えられたと川越先生はいう。その育児ノートの一部の朗読を聞いて、涙した参加者は少なくなかったのではないかと。

「アクティブ・デス」で紹介した和尚さんとの出会いと別れの話、NHK「あさイチ」で放映された、奥様を自宅で看取った本人が末期がんになり、最期まで自宅で過ごすことを決断した患者さんと家族の話。「やすらかな死」で紹介した患者さんが、残された日々を生きるための目標を見出せずに苦しんでいたが、明日からなすべきこと（死に行くための準備をすること）を見つけたことで生きる力につながった話。

病院としては自宅療養は認められない状況の中で、本人・家族の強い要望により退院し、食べたいものを食べ、やりたいことをやり、散歩にも出かけたこと。また、ある女性は自宅に戻ると、母、主婦、妻の役割を果たし、限られた時間を凝縮して生き、ともに人間としての命を全うした。

20年前テレビ朝日のドキュメンタリー「愛する人たちへ～最期は家で～」で紹介された患者さんのように最期まで自宅でという方の夢を実現できるようにするにはいけないと川越先生は強く思ったそうだ。

今後は医師対象の在宅緩和ケア、ホスピスケアの教科書を書きたいと思っていると話を結んだ

講演の途中には、川越先生の実姉・中島睦美さんと友人の上原高嶺さんのバイオリン演奏があり、講演の合間の一時をリラックスさせてもらった。

最後に「ユー・アー・マイ・サンシャイン」を会場全員で合唱して講演会は終了した。

講演終了後、会場に集まった様々な立場の参加者を司会者が紹介した。

聴衆を代表して日本対がん協会会長の垣添忠夫先生が、「私も家で死にたいと思っている。それには周到な準備としっかりした体力が必要と考えて体を鍛えている。」と感想を述べてくださった。



## 訪問ボランティア

## あんなことこんなこと

## ～「北枕はいやよ」～

一人暮らしの A さんの病状が進んで、電動ベッドを入れることになりました。ボランティア二人で、ベッドを入れる準備のために部屋の片づけをしました。

室内にあったりっばな人形ケースは、「お友達にあげる」、大きなソファは「廃棄する」と。自分の病気を受け入れて、淡々と旅立ちの準備をしているように感じられました。

大きなテレビが置いてあったので、テレビが見やすいように、ベッドの位置を考えて準備している時でした。

A さんに「北枕はいやよ」と言われて、私ははっとしました。私自身の無神経さを恥じると同時に、A さんの辛い気持ちを今更ながら思い知らされました。

(Y.A)

事務ボランティアの  
同行レポート

## 手作りランチで患者さんと過ごす昼の語らいの一時

## ～デイホスピスボランティアの紹介～

7月26日(金)10時15分からのデイホスピスボランティアの取材をしました。

デイホスピスとは、毎週金曜日、患者様にパリアンにお出でいただき、医師、看護師と一緒に手作りランチをいただきながら、昼の一時の語らいを楽しんでいただく会。

まずは開始ミーティング。川越博美ボランティア・コーディネータから本日出席される患者様の体調などの情報が提供されたあと、本日の献立の発表。本日の献立は、シャケ寿司、肉じゃが、ハウレンソウのおひたし、カブの味噌汁、野本さんお手製のブルーベリームースケーキ。

毎週3名でランチの用意をします。この日のボランティアはリーダーの野本ちさとさん、食事担当者の江口勇さん、中村景子さんの3名。



お茶を準備する担当者達

## 気兼ねなくおしゃべりを楽しんでもらえたら

この日の参加人数は患者様とスタッフの総勢10名。デイの3名で手際よく次々と料理を作っていきます。病院食のように味付けの薄いものかと思ったら、「普段、家庭で口にするものと同じ味付けなんですよ。家に籠りがちな患者さんが家を出て少しでも気分が晴れるように、暖かな雰囲気を作り、心を込めて家庭と同じ料理をお出ししています」と野

本さん。「同じ病気を持つ患者の方同士で気兼ねなく、おしゃべりと料理を楽しんでいただけたら」と中村さん。「普段は食欲のない患者の方でも、ほんの一口でも食べてみようかという気持ちになっていただけたら」と江口さん。



お揃いのエプロン姿のボランティアさんは心のこめて料理を作っていました。デザートは、野本さんが担当。ケーキ屋さんで売っているのと変わらない出来映え。テーブルに花も添えられ、暖かな雰囲気です。12時に患者の方がいらっしゃるまでの約一時間で、見事にお料理は出来上がりました。

ランチを囲んで、患者さんとスタッフとの話は弾んだことでしょう。

食事の後片付けのあと、終了ミーティングがあり、患者様の状態など気づきを述べあい、デイホスピスは午後2時30分終了しました。(KY)

## 伝言板



## 「メモルの集い」25年度第1回開催は9月28日

1周忌を迎えた遺族とスタッフが故人を偲び語らう場「メモルの集い」は、毎年3回開催する計画しており、平成25年度は9月28日、11月23日、1月25日を予定している。1回目は9月28日(土)午後1時30分～3時30分、パリアン9階で開催される。進行係は辻川さんが担当する。

## パリアンが関連する学会及び学習会等のお知らせ

- ・川越厚先生 出演 ラジオ日経「日曜患者学校」毎月第2日曜日 21時～21時30分  
(次回は9月8日。俳優の山本學さんをお迎えしたシリーズの3回目です。)  
終了後の放送は、ラジオ日経のホームページ(<http://www.radionikkei.jp/inochi/>)でいつでも聞くことができます。
- ・在宅ホスピス協会全国大会 9月27日(金)～29日(日) 静岡県浜松市  
教育講演:川越厚先生
- ・アジア・パシフィック・ホスピス・カンファレンス 10月10日(木)～13日(日) バンコク
- ・日本死の臨床研究会年次大会 11月2日(土)～3日(日) 島根県松江市

## 9月のデス・カンファレンス、事例検討会の開催予定日

デスカンファレンス: 9月27日(金) 17時～18時

事例検討会: 9月20日(金) 17時～18時



## 9月のボランティア活動予定

- ・メモルの集い: 9月28日(土) 午後1時30分～3時30分
- ・訪問ボランティア: 9月13日(金) 午後2時30分～
- ・デイホスピスボランティア: 9月6日、13日、20日、27日
- ・手作りボランティア: 9月24日(火) 午後1時～3時
- ・事務ボランティア: 9月21日(土) 午後1時～



## 事務ボランティアの四方山ばなし

3ヶ月に1度、パリアンではボランティアを対象とした講習会が開催されます。ボランティアは、もっと良い活動ができるように研鑽を積んでいます。

さて7月は、講師に吉野さん(訪問ボランティア、命日カードボランティア)を迎え患者様に行うアロマ・ハンドマッサージの講座が行われました。

オレンジの精油を使い、さわやかな香りに包まれながら、実技練習がスタートしました。力の入れ方、スピード、手順など、実際にやると難しいことだ



らけ……。見た目以上に難しく意気消沈していると「このマッサージは、受け手が他人に触れられていると感じることが一番の効果。言葉のいらぬコミュニケーション」だと吉野さんが話してくださいました。技術も然る事ながら、マッサージを介して「あなた

とのかけがえのない時間を大切に過ごしたい」という非言語的メッセージを伝えることができるのだと知りました。

専門職ではない私たちボランティアが、パリアンで活動させていただく意味を改めて再確認する貴重な時間となりました。(N.K)